

市民と歴史のふれあいの場「市民講座」を開催

市史編さん室では、毎年度、市民の皆さんに歴史に触れていただく機会として、生涯学習センターと協力して市民講座を開催しています。今年度のテーマは「八王子の江戸時代を探る」。合計4回の講座で行われ、講師は市史編集委員会近世部会から藤田覚、神立孝一、山崎圭の各氏が務めました。歴史学の第一線で活躍し、現在八王子市の市史編さんに、江戸時代ご専門の立場から携わっていただいている方々です。

市民講座の目的は、市史編さん事業をより多くの方に知っていただくとともに、市史編さんによって得られた成果を市民の皆さまへご報告することです。今回の講座では、本市内外に残る江戸時代の古文書（こもんじょ）を活用し、そこから何がわかるのか、当時の人びとはいかに地域で生きていたのか、といった内容をご紹介します。

当日の会場は、新たな市史編さんについて知りたい、と集まった市民の皆さまで満員となり、地域の古文書を活かした新しい視点からの講義に、参加者は深い関心を示されました。質疑応答も活発で、和やかな中にも緊張感のあふれる時間を共有しました。



【目次】

市民と歴史のふれあいの場「市民講座」を開催	1
専門部会の動きと計画	2
市史編さんに関する講座を用意しています	8
『八王子市史研究』原稿の選考結果	9
<地域からの声> ③ 八王子市みなみ野 糠信富雄さん	9
チャレンジインターンシップ体験記 佐藤友紀	10
市史編さんのあゆみ	11
受贈図書・資料	11
歴史の窓⑥ 大石氏と信濃 ～大石氏出自考～ 柳沢 誠	12

専門部会の動きと計画

今、発掘中につき

原始・古代部会長 関 和彦

八王子市の市史は八王子の歴史を「原始・古代」「中世」「近世」「近現代」の4区分とします。当然、古き時代の「原始・古代」から歴史を説き起こすことになります。市史は資料編・本編から構成されますので、当然、市史のスタートは「原始・古代 資料編」であり、市制百周年記念事業の中、平成23年度の刊行という重い責任があります。遠き時代に想いを馳せながら10名の部会委員、専門調査員で10回に及ぶ研究会を積み重ね、順調に調査、執筆は進んできています。

歴史は大地の上で展開し、そして刻される、その八王子の大地を北部、南部に分けて現地調査を行い、地域の方々の声、ご意見に耳を傾け、市史の生命線の「市民協働」をささやかながら実感し、新しい原始・古代像を描くエネルギーをいただきました。これから25年度の本編執筆・刊行に向けて市民の方々と語り合いをさらに大切にしていきたいと思っています。

また原始・古代の人びとが暮らしていた時代の八王子地域の自然・気象などの自然空間を探るために地下深くボーリング調査を行うことにしています。

八王子市域には実に1,000箇所以上の遺跡があります。現在の八王子市内開発を含む発展の表われでもあります。その過程で明らかになった遺跡・遺物は市民の共通財産であり、宝の持ち腐れになっては、歴史そのものの否定となってしまいます。

現在、その膨大な遺跡を各報告書をめくり、立地、時代、遺構、遺物などを一つ一つ検証しながら、遺跡の精選を行い、写真・地図など図版の多用、そして遺跡の全貌、性格などが理解しやすい説明を付す形で鋭意進行中であります。

「原始・古代 資料編」刊行の暁には、市民の皆様目に留まり、原始・古代の遺跡が現在の八王子市域のそれぞれの場所に浮かび上がり、日常生活の中で忘れられている歴史を振り返る契機になればと願っています。

また「資料編」は一般に「本編」の姉妹編的な扱いを受けていますが、「本編」執筆の基本資料として活用されていくものであり、歴史叙述の母として認識すべきものであります。

遺跡の位置を地図の上におとし、机一杯に広がる遺跡群を観察しますと河川流域毎に大きなグループが浮かんできます。八王子市域は西高東低、そして西部を源流とする河川が東流し、丘陵と谷戸が交互に並ぶという地形を有しています。原始・古代びとはその地形を受け止め、巧みに

生活していたと思われれます。わたしたちは先ず彼等が大地に残した遺跡を彼等の生活に合わせ、遺跡という多くの足跡を河川流域毎にまとめ、紹介する方法をとりました。谷地川・多摩川流域、川口川・浅川流域、湯殿川・山田川流域、大栗川流域であります。さて皆さまの生活圏はどの流域でしょうか。

今、原始・古代部会はまさに新たな歴史を「発掘中」であります。



南多摩窯跡群の実踏調査 (みなみ野)

中世部会の活動報告

中世部会長 池上裕子

中世部会では、毎月集まって会議や調査を行っており、原始・古代部会の方々や考古関係の方の協力を得て、「資料編」に載せる考古関係や石造物関係の資料の概要も固まっています。以下では、今年度に入ってからの方での調査を紹介しましょう。

5月には恩方地区の踏査を行いました。五月晴れのよい天気恵まれ、新緑の中を気持ちよく歩くことができました。上案下の熊野神社からはじまり、福源寺、龍泉寺、浄福寺、興慶寺、宮尾神社などを訪れました。龍泉寺、浄福寺では御住職に懇切にいただき、お話を伺うとともに、仏像の拝観、棟札などの調査を行うことができました。

8月には昨年に引き続き夏季集中調査を行いました。今年の夏はとりわけきびしい猛暑でしたが、20～22日の3日間、加住・滝山地区の踏査と聞き取り調査を3班にわかれて行いました。滝山城の城下にあたる地区で、宿や市、寺社をはじめ、戦国時代のこの地区のようすを伝える痕跡を探す調査でした。昨年もそうでしたが、今年も、ご自宅に招き入れていただきお話を伺ったり、棟札その他の資料を見せていただいたり、暑い外を案内していただいたりと、多くの方々のご好意を頂戴し、頭の下がる思いでした。少林寺、龍源寺、宝印寺のご住職にもたいへんお世話になりました。皆さまにこの場を借りて、お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

9月には18～20日に山口県・島根県で調査・撮影を行いました。山口市にある山口県文書館には毛利氏とその家臣関係の膨大な史料が保管されていますが、その中に家臣であった天野氏の関係文書があります。天野氏は後述の長井氏とともに、鎌倉時代に横山荘を支配した大江広元の子孫で、由井本郷の領主でした。文書館では、調査をお願いしていた文書の一部が見当たらないことに途中で気づき、緊張と焦りに襲われるという一幕がありました。しかし、文書館のベテランの職員の方が膨大な史料群の中から探し当ててくださり、ほっといたしました。長年のお仕事の蓄積がなせる技と感服いたしました。

2日目には島根県大田市の鶴岡八幡宮（南八幡宮）を訪れました。この神社の境内には経筒を納入した鉄製の塔があり、その中に大永5年（1525）に「大石源三源朝臣憲重」が納入した経筒があったのです。この経筒は現在は出雲市にある島根県立古代出雲歴史博物館に寄託されていますので、3日目にはそこで経筒と対面することができませんでした。

10月には市内の初沢町にあります高乗寺の文書調査を行いました。この寺は大江広元の子孫の長井大膳大夫高乗の開基と伝えられ、北条氏照の文書をはじめ、戦国時代から江戸時代の文書を所蔵されています。境内絵図も興味深いものです。親切にいただき、1日かけて撮影をさせていただきました。

当面の課題として、市内および都内近郊の文書調査を進めていきたいと思っています。



山口県文書館での調査（平成22年9月18日）

史料から人びとの暮らしを探る

近世部会長 藤田 覚

近世部会は、平成28年度までに「資料編」2冊、「本編」2冊を刊行する計画です。八王子市の市域は広く、かつ幸いなことに近世文書は大量に伝存していますので、市史「近世編」の刊行は、文字通り突貫工事とならざるを得ません。伝存史料をよく調査・収集し、十分に読み込んで吟味したうえで資料編を作成すること、さらにそれに基づいて質の高い八王子の新しい近世史を叙述する本編を作成することは、かなり困難な仕事になると予想されます。近世を担当する部会長として、率直に言って「無理なのかもしれない」としばしば考え込んでしまうことすらあります。それでも、限られた時間の制約の中で、できる範囲で恥ずかしくない市史を作成することをめざして活動しております。

50年、あるいは100年に一度しかない市史編さんの機会ですから、市内全域、一部は市外に伝来する古文書類を悉皆（しっかい）調査し、文書目録を作成し、古文書をマイクロフィルムに撮影し、そして古文書の保存措置を講じる作業を行っています。この手間のかかる地道な作業を行っている理由は、先人が遺してくれた貴重な文化遺産を何百年、何千年後までも伝えていく義務が私たちにあるからです。広い市域を限られた人員で作業していますので、なかなか思うように進みませんが、新史料が調査の過程でしばしば発見され、担当者は大喜びしています。まだまだ人に知られず眠っている古文書があるようです。お心当たりの情報がありましたら、ぜひ市史編さん室にご一報いただきたくお願い申し上げます。

資料編、本編の作成にあたる基本的な姿勢は、江戸時代の八王子市域に生きた人びとの足跡を、伝来した多様な史料に則して再現することにあります。具体的には、人びとは何を生産しどのように暮らしていたのか、人と人のつながりはどのようなものであったのか、そしてその中でどのような文化を生み出したのか、という点をできる限り明らかにすることです。たとえば、八王子では織物が特産であり重要であったことはいうまでもありません。しかし、江戸時代の人びとの生業は、自然条件や地理的条件などによりもっと多様なものでした。平地では畑作農業こそ基本であり、山間部では畑作のほか薪炭生産、林業が重要でした。市街地では、宿駅であり月に6回の市が立つところに特徴がありますが、人口1万人近い地方都市としての性格をもっています。市に関わる商売、旅籠屋、米屋その他のさまざまな商業・金融、交通運輸業

などさまざまあります。その生業のあり方に応じた生活と人のつながりが生まれます。決して個人で孤立して生きていたのではなく、家族、村、村と村の結合の中で暮らしていましたので、そのつながりを具体的に明らかにする必要があります。文化は、文字や絵画などに限ることなく、生産と生活に結びついて生まれる信仰や祭礼、諸芸能の興行などの生活文化や行動文化に目を向け、市街部と農村部との違いにも目を配りながら掘り起こしていきたいと考えています。



江戸時代の古文書調査（市史編さん室）

埋もれた歴史に光を

近現代部会長 新井勝紘

八王子市の市史の「近現代編」は、40数年前の第一期の市史の叙述範囲が三多摩地域の他の市町村史と異なり、ほぼ明治時代で終わっているため、今度の市史での叙述が、大げさにいえば、市史として初めて正面から取り上げ、初めての歴史像を提示することになる。ただ以前に完成している『八王子市議会史』で、第一期の市史の空白をかなり補ってくれているので、まったくの白紙状況ではないし、また、市民をはじめ、これまで多くの方が八王子地域の歴史の研究をこつこつと積み重ねてくださり、その成果も大きなものを残してくれている。今度の新しい市史の編さんに携わってみて、私は今、改めてそうした地域史の研究の重さをひしひしと感じているところでもある。

そうはいっても、明治以降の近代化にともなう街や農村部の変っていった時代や、空襲の焼け野原から街が大きく変貌していった時期、あるいは丘陵地の開発が急にすすみ、急激な人口増加をもたらした時期、それは同時にこれまで長い間守ってきた豊かな自然や緑が次々と失われていった時代でもあったが、そうした戦前から戦中戦後へと100年近い流れの中で、八王子が遂げてきた劇的な変貌史は、空白部分が多く、まだまだしっかりととらえきれていないといってもいいだろう。前回の市史編さんから現在進行中の新しい市史の取り組みまでの40数年間の空白は、とりわけ近現代史の分野では大きいものがあるように思う。当然ながら、市の歴史に関する仕事で重なってくる郷土資料館や文化財課、あるいは図書館などのこの間の貴重な積み重ねは、市史にとっては土台でもあり軸でもあるので、そうした部署との連携がより大事になっている。

そうした八王子の空白部分を埋めるためには、市民研究者をはじめ、前述の関連部署、あるいは調査研究を重ねて歴史研究の成果を残してきた専門の研究者の力も、大いに借りなければならぬであろうという思いで、今年度から歴史の証言とも言うべき資料を得るために、聞き取り調査も始めており、今後も継続していく予定である。

私はこうした空白部分が多いぶんだけ、八王子の近現代史はまだまだ埋もれている歴史事象が多いと思うので、悲観ばかりしているわけではない。今度の市史は、そうした埋もれてしまった歴史に少しでも光をあて、市民の日常の生活史や精神史あるいは市民の文化史という視点をもって取り組むつもりである。八王子の近現代史をどう描くのかについて、市民の皆さんの英知をお借りしながら、新しい史資料の発見にも取り組みたいと思っている。



八王子市と合併した旧町村の資料調査（市史編さん室）

市民との協働で市内全域の植物相調査

自然部会長 畔上能力



八王子自然友の会のご協力による植物調査（八王子城跡）

平成22年度に入って、いよいよ自然部会も現地調査が軌道にのりはじめ、鳥類をはじめ動物、昆虫、植物など、それぞれの分野での現地調査が行われ、データの蓄積に追われているのが現在の状況です。私の専門分野である植物班においては、今回八王子市全体を1キロメートル四方のメッシュで区切り、各メッシュ内の植物を調べていくという手法を取り入れました。なにしろ八王子市は面積が広いのでメッシュ数も95個の多数にのぼります。最初は不安でしたが、『東京都現存植生図』作成に関わってこられ、メッシュ調査に実

績のある横浜国立大学名誉教授の奥田重俊先生の指導のもとに、分類能力に優れた、しかも体力のある若い方々の協力も得られ、着々とデータが集積されています。また八王子自然友の会の協力もいただき現地調査のほか、一部有志の方々には標本整理にもご助力いただいています。

現在、東京都では『東京都の保護上重要な野生生物種リスト（東京都レッドリスト）』の2010年版を作成中で、今回八王子市史自然部会に関わっておられる先生方はほとんどが各分野において調査委員として関わっておられることから、資料や調査データが共用できるという利点に恵まれたことは幸運でした。とくに絶滅の危機にひんしている野生生物（植物、ほ乳類、鳥類、昆虫類、爬虫類、両生類、淡水魚類、無脊椎動物類）などを国、東京都レベルで改めて選定されることとなり、八王子市における目録作成、および保護上重要な野生生物種の選定上重要な指針となります。

植物班では、今回の現地調査によってすでに高尾山初記録、東京都初記録の植物も発見されるといった成果もあり、急速に熱が高まってきている状態です。しかし逆に、かつて記録されていた植物がその生育地点から姿を消していきがっかりさせられた事例もあります。自然災害による都合や、動物による食害などのほか、人為による消滅も多々みられました。最近の動向としては大切な情報がいち早く拡散し、保護を要する植物などが姿を消してしまう事件があり、情報公開にも慎重であらねばならないと考えています。

～「レッドリスト」とは～

上記文中にでてきた「レッドリスト」とは、絶滅のおそれのある野生生物（動植物）のリストです。（レッドには「警告」の意味があります）生物の生息情報を調査して、絶滅（当該地域においてすでに絶滅したと考えられるもの）・野生絶滅（飼育・栽培下では存続しているもの）・絶滅危惧（野生での絶滅の危険性があるもの）などいくつかのカテゴリーにまとめられているものです。

自然部会では植物、ほ乳類、鳥類、昆虫類、爬虫類、両生類、淡水魚類などの生物調査が着々と進んでいるところですが、現在の八王子市にどんな種が生育しているのか、または姿を消しつつあるのか、上記のメッシュ調査のような丹念な調査により、もうすぐそれらがみえてきます。

八王子市の根おいの文化を探る

民俗部会長 小川直之

編さん体制と基本的な方針

「民俗編」の刊行は平成28年度に予定されており、平成21年度には調査、執筆にむけて部会委員・専門調査員を委嘱し、民俗部会の活動を始めています。部会委員と専門調査員は10名がおり、それぞれが分担分野をもって市域各所で市民の方々の協力を得ながら調査を進め、その成果が集まりつつあります。

現在進めている編さん活動は、21年度に数回の部会で検討を重ねた基本方針と計画に基づいています。「民俗編」は、市民生活の具体的な姿を市民の方々から聞き取り調査をして資料集積を行うため、

まずは昭和30年代における民俗事象の体系的な把握をめざしています。そして、これをもとに歴史的な遡及に努めながら、一方ではその後の急速な都市化の進展にともなう民俗の変化変容を具体的に把握することを基本方針としています。こうした作業を行いながら、市域の民俗文化の特質を検討し、八王子市の「根おいの文化」を明らかにすることを目指しています。

民俗編編さんのための調査

民俗編編さんの目的を達成するため、民俗部会では現在4つの活動を並行しながら進めています。それは①テーマ別調査、②地区別民俗誌的調査、③写真資料による民俗調査、④地域研究に関する文献調査です。

①テーマ別調査というのは、市域民俗の全体像や特色をテーマ別にとらえる調査です。開発による地域変貌、民家と住環境、民俗芸能、祭礼、民具、職人、日記史料にみる民俗、織物、高尾山信仰、祭囃子の10テーマで、これを視点にして10名が分担して市域各所で調査を行っています。

②地区別民俗誌的調査は、市域はその立地や集落状況から山地部、台地・丘陵地部、宿と町場の3つに区分でき、山地部から2地区、台地・丘陵地部から2地区、そして旧八王子市街地の計5地区で民俗調査を行うものです。平成22年度は恩方地区を選び、社会組織、生産・生業、衣食住と環境、寺社信仰と民間信仰、年中行事、人生儀礼、口承文芸・民俗芸能の7分野を分担して調査を進めています。

③写真資料による民俗調査は、市域に残されている古写真から生活の具体的な姿を明らかにする調査です。「民俗編」では写真資料をもとに生活の姿、地域の景観、生活用具や生活のしつらえなどを叙述した頁を加えたいと考えています。

④文献調査は、民俗学や地域史などの分野で従来に蓄積された研究成果、資料を民俗編編さんに活用するための調査です。現在、文献目録の作成を進めています。

こうした活動の成果は、「民俗編」のみならず、「資料集」としての刊行や市史研究誌への発表も予定しています。詳細な調査成果を公刊するのは、市史編さん事業が市域の歴史や文化の研究、教育教材の作成、さらにはより個性的で豊かな文化創造に寄与できることを願ってのことです。



小津町会館での部会調査(平成22年11月1日)

市史編さんに関する講座を用意しています

市史編さん室では市史編さん事業について広く市民に普及を図るために、また、八王子の自然や歴史に対する理解を深めていただくために、八王子学園都市大学「いちよう塾」への講座提供や生涯学習センターとの共催で市民講座を開催しています。今年度は下記の講座を実施(予定含む)しています。

■ これから開催される講座 ～いちよう塾 提供講座～

平成23年 2月19日(土) 13:30～15:00 学園都市センター イベントホール	講座名 「長池公園の歴史とその植物多様性」 —多摩丘陵の自然資源を考える—	講師 内野 秀重 八王子市市史編集専門部会自然部会 専門調査員 長池公園自然館 副館長
八王子東部に位置する長池公園には、700種以上の野生植物が生育し、希少生物を含む動植物の宝庫として保全・活用されています。長池公園の沿革とその自然の姿、またユニークな保全管理活動を通じて、地域の生物多様性、地域の自然資源の守り方等を啓発していきたいと考えます。		

※ 上記は公開講座ですので、受講料は無料です。またご予約、お申込みは不要です。

日時・会場をお確かめの上、直接会場へお越しください。(入場は先着順/定員216名)

＜お問い合わせ＞ 八王子市学園都市大学 いちよう塾 事務局

TEL 042-646-5621 <http://www.hachiojibunka.or.jp/gakuen/icho-juku/index.html>

■ 平成22年度開催講座 いちよう塾への提供講座

日 程	テ ー マ	講 師
平成22年 4月 3日	多摩の桜を楽しむ	八王子市市史編集専門部会 自然部会 部会委員 菱山忠三郎
5月 29日	多摩の医療史	津久井町史編集委員 沼 謙吉
5月 8日 ～ 6月5日(全5回)	1920年代の八王子を探る	八王子市市史編集専門部会 近現代部会 専門調査員 保坂 一房
6月 21日 28日	八王子の近世社寺建築と地方 大工、彫物師	八王子市市史編さん審議会 副会長 相原 悦夫
9月 4日	近世前期八王子の養蚕と織物	八王子市市史編集委員会委員長 近世部会 部会長 藤田 覚
平成23年 1月 17日 24日	近世から現代までの八王子の 変容を見よう	八王子市市史編さん審議会 副会長 相原 悦夫

市史編さん室・生涯学習センター共催市民講座 『八王子の江戸時代を探る』

日 程	テ ー マ	講 師
平成22年 10月 29日	江戸幕府と地域社会	八王子市市史編集委員会委員長 近世部会 部会長 藤田 覚
11月 5日	地域経済から見た歴史	八王子市市史編集専門部会 近世部会 副部会長 神立 孝一
11月 12日	天保の飢饉と八王子の村々	八王子市市史編集専門部会 近世部会 部会委員 山崎 圭
11月 26日	新しい市史編さんの現在	八王子市市史編集委員会委員長 近世部会 部会長 藤田 覚

『八王子市史研究』原稿の選考結果

市史編さん室では、編さん事業への市民参加を実現する方法の一つとして、平成23年3月刊行予定の『八王子市史研究』の原稿を広く市民の皆さまから募集しました。その結果8編の応募があり、市史編集委員会の中に設けた『八王子市史研究』投稿論文等審査会による厳正な審査の結果、下記の2編が掲載予定原稿として選ばれました。

『八王子市史研究』に掲載予定

- ・資料紹介「八王子機業組の成立」 沼 謙吉
- ・調査報告「八王子におけるクマタカの繁殖記録」 御手洗望・山口 孝・清水盛通

上記2稿は、『八王子市史研究』創刊号に「一般投稿」として掲載する予定です。原稿をご投稿くださいました皆さまに、心よりお礼申し上げます。

<地域からの声> ③

八王子市みなみ野 糠信富雄さん

本年11月1日、さまざまな市民活動の拠点として、由井市民センターみなみ野分館が開館した。施設の特徴の一つには、地域の歴史や自然、民俗を紹介した、ふるさと資料室の設置があげられる。さて、この特色あるみなみ野分館館長に就任したのが、糠信富雄さんである。当地で生まれ育った糠信さんは、古文書や民具といった地域資料の発掘にも力を入れながら、地域の伝統技術である目籠づくり体験を企画するなどの活動に、熱心に取り組んできた。

「新しく移って来られた方にも、地域に愛着をもってもらいたいんですよ。多くの皆さんに、この地域の歴史や技術に触れてもらいたいですね」と話す糠信さんは、本当に楽しそうだ。「新旧住民が入り混じるニュータウンの雰囲気は？」と尋ねると、「この地域は変わったけれど、昔から住む人も新しく入った人も、みんな仲良く暮らしていますよ」と笑う。

取材に訪れたこの日、糠信さんは目籠づくりを伝承する佐宗重治さん夫妻とともに、雑誌の取材に応じていた。それに丁寧に応えながら、糠信さんは「今度の市史編さんを機会として、市内各地域の歴史資料を保存することはもちろん、目籠づくりのように、私たちの暮らしを支えてきた技術も、ぜひ取り上げていただきたいですね。そうすれば市民に愛される市史ができると思いますよ」と語る。

目籠づくりに打ち込む佐宗さんと会話しながら、記者の質問にもニコニコして応じる、その笑顔は糠信さんの温厚篤実さと懐の深さを象徴するかのようであった。



チャレンジインターンシップ体験記

八王子市の市史編さん 一人と人々が織りなす歴史—

帝京大学文学部史学科3年 佐藤 友紀

博物館や郷土資料館でのインターンシップ先を探していたところ、地元の八王子市役所市史編さん室でインターンシップ生を受け入れていることを知りました。早速、応募したところ受け入れてくださる連絡をいただきました。小さいときから日本の歴史に興味があり、大学も史学科に進んだ自分にとって、郷土の歴史をまとめている市史編さんの現場を体験することができた貴重な経験となりました。

インターンシップ初日、職員の皆さんと一緒に働くという緊張感と、市史編さん室が廃校になった小学校にあるため、まるで職員室に呼び出された生徒のような緊張感の中、実習が始まりました。担当の方から、八王子市が行っている市史編さん事業の目的と進捗状況の説明を受け、4年前から始まった市史編さん事業の必要性和重要性がよくわかりました。

今回の自分に与えられた主な仕事は、上野町にある八王子市民会館建築に関わる設計図や館内設備の購入過程資料などの整理・目録作成と、加住地区にある旧家を訪問してその家に伝わる古文書などの資料を確認する作業でした。また、八王子市郷土資料館では、八王子の歴史について学芸員の方から説明を受けました。郷土の伝統芸能である車人形の操作も体験することができました。加住地区の旧家訪問では、職員の方と調査員の方とともに、旧家のご当主から地区の歴史についてのお話を聞かせていただいたほか、先祖から代々受け継がれてきた家系図や日記といった、貴重な一次資料を拝見させていただきました。さらに帰りがけには職員の方に戸吹町の桂福寺にある旧明化学校（戸吹町会館）へ案内していただきました。明化学校は明治時代初期、明治政府の施行した学制を受け造られた教育施設で、私自身も幕末・明治期の庶民教育を専攻しているので自身の今後の研究に大いにプラスになりました。

私は、市史編さんに携わる皆さんは先人を敬う気持ちがあふれるからこそ、貴重な話を聞けるのだなと強く感じました。職員の方が、「近頃は歴史学ということより法学や経済学といった分野が重要視されるが、法学や経済学も過去の人作り上げた公式や法則をもとにしている。大きな目で見ればみんな歴史学の一部」「市の歴史から過去の成功や失敗を学ぶことで、今後の八王子をよりよいまちとして創ることができる」「役場に記録されている歴史だけでは真の歴史はわからない。八王子に住む人たちに直接聞くことこそ市史編さんには必要だ」と話されました。100人には1



00の歴史があります。八王子の歴史の長さを考えれば、今自分が立っているこの土地にどれほど多くの人の歴史が積み重なっているのかを思うと、不思議な感覚を覚えます。少しずつ解きほぐし、広げていくというとても地道な作業の連続だと思いますが、次の時代に歴史を伝えるという、市史編さん事業に携わる職員やボランティアの皆さんの情熱を肌で知ることができました。今回の体験は短期間でしたが、歴史を専攻している者として、また、八王子市民として市史編さん事業の一部を体験できたことは、大きな糧となりました。お忙しい中、ご指導いただいた職員や調査員の皆さま、ありがとうございました。（さとう ともき）

市史編さんのあゆみ ー平成22年6月1日から平成22年10月31日まで

- 6月 4日 近世部会平成22年度第2回部会会議を開催
5日 近現代部会橋本義夫関係史蹟実踏調査
7日 法政大学多摩図書館より新たに4人分の図書館利用カードを受領
自然部会平成22年度第2回植物分野会議を開催
20日 中世部会平成22年度第2回部会会議を開催
平成22年度第1回八王子市市史編集委員会を開催
21日 原始・古代部会平成22年度第3回部会会議を開催
7月 1日 『稲荷山通信』第5号発行(2,000部)
4日 はちおうじ出前講座を開催
5日 民俗部会平成22年度第2回部会会議を開催
7日 原始・古代部会平成22年度第1回実踏調査
8日 原始・古代部会平成22年度第4回部会会議を開催
9日 近世部会平成22年度第3回部会会議を開催
18日 中世部会平成22年度第3回部会会議を開催
19日 近現代部会平成22年度第1回部会会議を開催
27日 近現代部会平成22年度第2回部会会議を開催
原始・古代部会平成22年度第5回部会会議を開催
8月 12日 平成22年度チャレンジインターンシップ学生の受け入れ
20日 中世部会平成22年度夏季集中調査(～8月22日)
26日 近世部会平成22年度第4回部会会議を開催
30日 近現代部会橋本義夫関係資料検討会を開催
9月 11日 原始・古代部会平成22年度第6回部会会議を開催
12日 平成22年度第2回市史編集委員会を開催
16日 原始・古代部会平成22年度第7回部会会議を開催
18日 中世部会平成22年度第1回資料調査(～9月20日)
22日 近世部会第1回専門調査員・調査員会議を開催
23日 近現代部会平成22年度第3回部会会議を開催
10月 7日 平成22年度第2回『八王子市史研究』編集会議を開催
8日 近世部会平成22年度第5回部会会議を開催
17日 中世部会平成22年度第2回資料調査(初沢町 高乗寺)
25日 民俗部会平成22年度第3回部会会議を開催
26日 原始・古代部会平成22年度第8回部会会議を開催
28日 平成22年度第3回『八王子市史研究』編集会議を開催
29日 平成22年度市史編さん室・生涯学習センター共催「市民講座」を開催
(～11月26日)

受贈図書・資料(平成22年6月1日から平成22年10月31日まで)

多くの方々から、図書や資料をご寄贈いただきました。御芳名を記し、謝意を表します。

【個人など】 坏文子 畔上能力 石崎俊朗 大沢敬之 神立孝一 佐々木蔵之助 佐藤秀文 獨峰山高楽寺 沼謙吉 橋本鋼二 橋本緑 本間岳人 増渕滋 村野圭市 村松英二 山本仁(敬称略・50音順)

【公的機関】 学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻 日野市環境情報センター 板橋区公文書館 伊賀市企画総務部総務課市史編さん係 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 石川町教育委員会町史編纂室 横手市史編さん室 相模原市立博物館市史編さん班 横浜市史資料室 館林市史編さんセンター 島根県立古代出雲歴史博物館 座間市教育委員会教育部生涯学習推進課市史編さん係 仙台市博物館市史編さん室 くにたち郷土文化館 東京大学総合研究博物館 財団法人たましん地域文化財団歴史資料室



「大石系図」(木曾大石系譜)の冒頭部分。源義仲より始まっている。系図の全体は『八王子市史』附編(昭和43年〔1968])や杉山博・栗原伸道編『大石氏の研究』(関東武士研究叢書第二巻、名著出版、昭和50年〔1975])で確認することができる。

大石氏は室町時代、関東管領山内(やまのうち)上杉氏のもとで、武蔵国の守護代をつとめた有力氏族である。大石氏は南北朝時代の1350年代以降、山内上杉氏に従って関東に進出したとみられている。『新編武蔵風土記稿』等によれば、高月城(高月町)や滝山城(高月町・加住町一丁目・丹木町一～二丁目)、また浄福寺城(下恩方町)を築いたとされており、周辺には浄福寺(下恩方町)や心源院(同)等、大石氏を開基とする寺院も複数ある。大石氏は戦国大名北条氏に圧倒されるまで、200年以上にわたって、多摩地域、ひいては関東を活動範囲とした。

大石氏は上記のほか、市の南部、由木地区にも痕跡を残す。松木には館跡とされる遺跡が発掘されており(多摩ニュータウンNo.107遺跡)、また下柚木には系図(「大石系図」)を伝えてきた旧家もあり、大石氏を開基とする古刹、曹洞宗永林寺がある。こちらは大石氏居館跡の史跡として知られる。

「大石系図」には、北条氏照(当初は大石源三)が養子入りしたことも記されており、大石氏研究に不可欠な史料として、注目を浴びてきた。特に、木曾(源)義仲(1154-84)の後裔を称している点、諏訪氏や仁科氏等、信濃国の有力氏族が登場する点が興味深い。これらは、大石氏が信濃からやってきたのではないかと、という説の根拠にもなっている。

長享元年(1487)に書かれた万里集九(ばんりしゅうく)の『梅花無尽蔵』(『続群書類従』)には、大石定重のために作った「万秀齋詩序」が収められており、そこでも定重を義仲の「雲孫」(9代目の子孫)であるとする。この時点で系図の有無は確認できないものの、室町時代には義仲を祖先とする伝承自体があったことがわかる。

先行研究をみると、昭和47年(1972)刊行の『大石氏の研究』(八王子市教育委員会)では、長野県南佐久郡八千穂村(現佐久穂町)大石が、大石氏の出身地かとする。同書によれば、当地は「大石川」「大石峠」等の地名があり、古い歴史を有する場所としながらも、現地に関係する記録はみあたらないという。近年では、同じく長野県の小県郡(ちいさがたぐん)東部町(現東御市)大石ではないかとする説もある。^{※1}

では、小県郡の大石に、大石氏の痕跡はないのだろうか。今、『長野県町村誌』東信篇の「滋野(しげの)村」の項をみると、年代不詳ながら「大石太郎」がいたとあり、大石氏の城跡と伝わる場所もあるらしい。近隣の武士祢津氏に滅ぼされたため、詳細は不明とも書かれている。

果たして大石太郎が、関東に姿を現わす大石氏とつながるか否か、十分な証拠はない。参照した『長野県町村誌』自体、昭和初めに編さんされた地誌であり(昭和11年〔1936〕編)、中世に遡るには少し頼りないかもしれない。

小県郡の大石は、近くに木曾義仲が挙兵したという千曲川の「白鳥川原」もあり、彼を祖先と仰ぐ大石氏の出身地としては好立地と考えるが、どうだろうか。ぜひ現地へ赴き調査してみたいところである。
(やなぎさわ まこと)

注※1 加藤 哲「中世後期多摩地域の領主と大名権力」『多摩のあゆみ』90号、平成10年(1998)

参考文献：黒田基樹編『武蔵大石氏』(論集戦国大名と国衆1、岩田書院、平成22年〔2010〕)～大石氏研究の動向がまとめられ、大石氏の系譜が整理されている。また本文に引用した『大石氏の研究』が再録されている。